

静まれ、わたしを神と知れ

詩編第46編



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖霊降臨後第11主日

2025年8月24日

京都聖三一教会にて

今日は先ほどご一緒に唱えた詩編第 46 編を味わってみたいのですが、その前に旧約聖書のイザヤ書の箇所（28:14-22）について少しだけ触れておくことにします。

これは今から 2700 年も前の、ユダの国で活動した預言者イザヤの言葉です。当時、東からは大国アッシリアが迫っており、ユダの指導者たちは戦争準備を強めていました。しかしイザヤはそれに強く反対して言いました。

「嘲る者らよ、主の言葉を聞け／エルサレムでこの民を治める者らよ。」イザヤ書 28:14

「嘲る者ら」というのは、イザヤを嘲る当時の国の指導者たちです。

「お前たちは言った。『我々は死と契約を結び、陰府^{よみ}と協定している。洪水がみなぎり溢れても、我々には及ばない。我々は欺きを避け所とし、偽りを隠れがとする。』」28:15

「我々は死と契約を結び、陰府と協定している。」だから安全だ、というのは、南の大国エジプトと秘密協定を結んだから大丈夫だ、ということです。これに対してイザヤは主の言葉を告げて、およそ次のように言いました。――

正義も公正も投げ捨てて、偽りを横行させたままでは、決して国の安全は保てない。やがておまえたちの言う「陰府との協定」、つまりエジプトとの秘密軍事協定は無意味であることがあ

らわになる。神の民と称しながら神を忘れて戦争準備に走るこの国を、神は滅ぼされる。

神が求めておられるのは平和なのです。

今日の箇所はこのイザヤの言葉で結ばれます。

「わたしは定められた滅びについて聞いた。それは万軍の主なる神から出て国全体に及ぶ。」 28:22

遠い昔の預言者の言葉は、平和の実現を強く呼びかけています。そしてその言葉は、今日のイスラエル国家の暴虐を暴き、また日本がアメリカとの同盟のもとに進めている大規模軍事拡張に否！を訴えている。そうわたしには聞こえます。その平和への呼びかけは、今日の詩編第 46 編にも響いています

詩編は旧約聖書に収められた祈りの詩集です。キリスト教は最初の頃からこの詩編をわたしたちの祈りとして受け入れ、聖公会も祈祷書の中に詩編 150 編全体を収めて、礼拝の中で大切に用いてきました。わたし自身もまた、この詩編によってどれほど助けられたかわかりません。

今日の第 46 編を元にしてルターは「神はわがやぐら」という聖歌を作詞作曲しました（聖歌 453）。また聖歌 452「神はわが力、わが高きやぐら」の歌詞もこの詩編に基づいています。

「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの力 || 悩むときの変わらぬ助け」(日本聖公会祈祷書の詩編から引用)

これは信仰告白です。広くは世界の混乱と危険があり、狭くは人との間での葛藤がある。不当に侮辱され、圧迫され、危険にさらされて耐えがたい苦しみに襲われるとき、どこに身を避けるところがあるのか。どこにわたしたちの助けがあるのか。神にあるのです。神にしかないのです。

「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの力 || 悩むときの変わらぬ助け」46:1

この1節に、2000年、3000年以上の、苦しめられてきた人々の思いが、そして確信が込められています。

「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの力 || 悩むときの変わらぬ助け」

これを唱えるとき、これを心に収めるとき、わたしたちも神がわたしたちの避けどころ、力、助けであることを知り、また経験するのです。

「たとえ地が揺らぎ、山が海に崩れ落ち || 海がどよめき、しぶきを上げ

その勢いに山々が揺れ動いても || 決して恐れることはない」

46:2-3

天変地異でしょうか。神が創造された世界が混沌に帰してしまうような事態まで、詩人はイメージしているのでしょうか。

それでも「決して恐れることはない」と言う。神によって守られているので、神の手に囲まれているので、生きようと死のうと、大丈夫だというのです。

「川が流れ、そのせせらぎは || 神の都、いと高き方のみ住まいを喜ばず」46:4

水に乏しいエルサレムにはこれは合わない、とも言われます。けれども想像を広げて、聖書の中の最初の川を思い出すと、あのエデンの園を潤した川は、四つに分かれて世界に広がっていききました（創世記 2:10）。また聖書の最後、ヨハネの黙示録の最後、第 22 章には、水晶のように輝く命の水の川が、神の都の中央を流れる光景が描かれています。その両岸には命の木があって、毎月実を実らせる。その木の葉は諸国の民の病を癒す、と記されています。これは人の喜びであり、神の喜びです。

話を広げ過ぎたかもしれませんが、これは詩なのですから、このように連想することも許されるでしょう。

ところでこの詩編第 46 編には、神への深い信頼があり、神の業が歌われる一方で、祈り求め、祈願の言葉がありません。祈りというと、わたしたちはまず自分の願いを思い浮かべるのですが、この詩編にはそれがありません。神とその業を思い、それを歌うか語る。それを信頼して言葉にする。これも大切な祈りです。このような祈りをわたしたちは忘れていたかもしれま

せん。この後に唱える「ニケヤ信経」は神の救いの業をたどって行くものなので、これを祈りとして唱えましょう。

さて神の業についてこう歌われます。

「主のみ業を仰ぎ見よう || 主は地に不思議なみ業を行われた」 46:8

神はどのような業を地に行われたのでしょうか。不思議なみ業とは何でしょうか。それが次の9節です。

「主は地の果てまでも戦いを断ち || 弓を折り、槍を砕き、盾を焼かれた」 46:9

これが主の業です。全世界から武器を、兵器を絶滅させてしまわれる。神は戦争をやめさせ、世界に永遠の平和をもたらされる。現実には戦争があり、争いがあり、憎しみがある。けれどもそれらを神はすべてなくしてしまわれる。またわたしたちの心を清めて、そこに平和の種を蒔いて育んでいかれる。

ここまでは、人が、詩人が語っていました。神について、神の業について、詩人が言葉にし、信仰告白をしてきたのです。けれどもここに至って初めて、神みずからが口を開かれます。

「静まれ、わたしを神と知れ || わたしはもろもろの民の手でたたえられ、あまねく世界であがめられる」 46:10

神が語り、人は沈黙します。わたしたちは神の前に静かになります。神がご自分を現して「わたしを神と知れ」と言われる。

静けさのうちに神の臨在をわたしたちは経験する。やがてそこから神への賛美が起こってきます。

「わたしはもろもろの民の手でたたえられ……」。

「手」とは拍手でしょうか。韓国の礼拝で、神に向かって感謝賛美の拍手をするのを見たことがあります。もっともそれだけではなく、「手による賛美」とは、神への賛美を祈りと行動とおして現すことでしょう。

詩編第 46 編はこう締めくくられます。

「万軍の主はわたしたちとともにおられる || ヤコブの神はわたしたちの砦」 46:11

神がわたしたちとともにおられる平安と力強さ。わたしたちは神に守られつつ、神とともに働く。戦いをやめさせ、平和を実現される神とともに、わたしたちも平和を求めて祈り働く。その歩みへと、この詩編第 46 編はわたしたちを招いています。

最後の 10 節 11 節をご一緒に唱えて祈りましょう。

「静まれ、わたしを神と知れ || わたしはもろもろの民の手でたたえられ、あまねく世界であがめられる
万軍の主はわたしたちとともにおられる || ヤコブの神はわたしたちの砦」